

中学校音楽科におけるソフトスキルの育成について

和歌山大学教育学部：菅道子（研究代表）、上野智子
附属中学校：那須祐哉

1. はじめに（共同研究の趣旨と目的過）

本校音楽科では「主体的に学習に取り組む態度」の育成について研究してきた。

本年2023（令和5）度はソフトスキル（非認知能力）に着目し、それらを伸ばすための授業づくりや生徒たちのソフトスキルを積極的に評価することにより、生徒たちのソフトスキルやその自信が高められ、より一層主体的に学習に取り組むことができるのではないかと考えた。

本連携事業では、大学教員と中学校教員が連携し、生徒が授業の中でソフトスキルを発揮できる教材の扱い方、指導と評価の一体化など音楽科授業のあり方を検討することを目的として、題材「《きみとともに》」の歌詞や曲想を味わって、曲にふさわしい合唱表現をしよう」の授業づくりの共同研究を進めた。

2. 研究の経過

本年度の研究の経過は、表1の通りである。

表1 2023（令和5）年度の研究経過

月 日	概要
2023年9月8日（金）	歌唱《きみとともに》の授業作りに関するカンファレンス
10月30日（月） 11月2日（木）	研究授業と協議（附属中学校研究協議会後に実施）

3. 年間を通しての取り組み

（1）常時活動

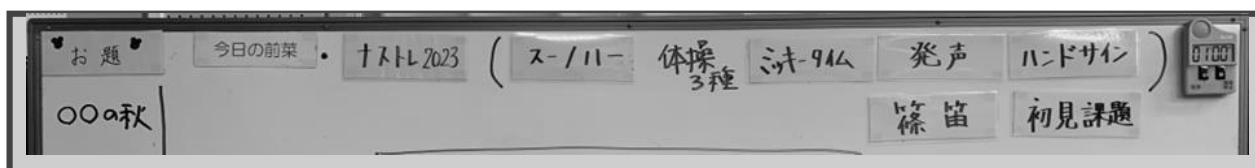


写真1 ホワイトボードに示した常時活動の流れ

附属中学校音楽科授業では、年間を通して二つのことに取り組んできた。

一つは、必ず同じ内容の常時活動を5分程度行ってきたことである。内容は、無理のない発声で歌うための呼吸法や上半身の脱力のための体操、頭声的発声で話をする時間、ソルフェージュ力を底上げするためのハンドサインや初見視唱、器楽教材である篠笛などである。常時活動のねらいは、生徒一人ひとりの音楽の基礎力の習得である。音楽の基礎力が伴っていなければ、生徒自身が様々な学習活動や課題に円滑かつ自信をもって取り組むためにできないと考えるため、このような時間を設定して力の底上げを図っている。

(2) ICT 端末の利用と単元を通したつながり

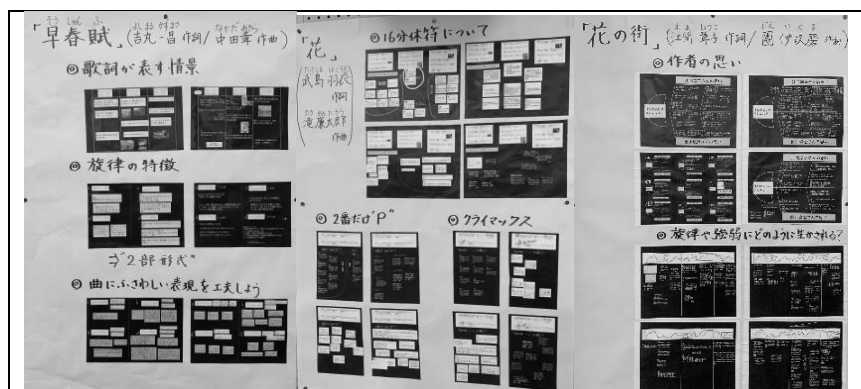


写真2 ICT を利用した意見交流の麗

もう一つは、年間通じて ICT 端末の活用を取り入れるようにしたことである。本校では、ロイロノートというアプリケーションの共有ノートの機能を使用することができる。今年度は ICT 端末をすべての音楽科の単元でも活用し、全員が同じカード上で課題に対する意見を記入して共有したり、グループ活動や学級で意見交流したりする時にも活用した。

4. 授業実践

題材名「きみとともに」の歌詞や曲想を味わって、曲にふさわしい合唱表現をしよう。

(1) ねらい

本校3年生は明るく、授業に対して前向きに取り組もうとする生徒が多い一方で、自分の意見や技能に対する自信のなさから、発表の場では十分に力を出しきれない一面もある。そのため、グループやパートなど少ない人数で意見を述べたり、演奏したりする場面を授業の中で意識的に取り入れている。これまで歌唱教材として、「花」（武島羽衣作詞／滝廉太郎作曲）、「花の街」（江間章子作詞／團伊玖磨作曲）、「早春賦」（吉丸一昌作詞／中田章作曲／中田喜直伴奏編曲）を学習してきた。

これらの楽曲の学習から、言葉と音楽（旋律の動き、強弱など）、音楽を形づくっている要素同士（旋律の動きと強弱など）がつながっていることを学んできた。しかし、自分の考えた工夫や歌詞の内容を、演奏として音で表すところまでには至っていない生徒が多い。

本題材では、生徒が曲想や歌詞の内容に関心をもち、旋律、テクスチュア、強弱との関わりについて理解した上で、歌詞内容に応じた歌い方や全体の響きを感じ取ること、また、合唱表現を創意工夫し、歌唱で表現できる力を身につける機会とすること、この二点を単元のねらいとした。また、「3.」で示した通り、常時活動を通しての音楽の基礎力アップと ICT 端末活用によって、一人一人が自信と安心感をもって学習に取り組めることができるよう留意して授業構成を行った。

(2) 本時の展開（2／3時）

○本時の目標

歌詞と音楽を形づくっている要素（音色、速度、旋律、テクスチュア、強弱など）との関わりを手掛かりに音楽表現の工夫について思いや意図をもっている。

○本時の展開

<p>○学習内容 ・学習活動（学習形態）</p>	<p>◇評価場面〈評価方法〉と見取りのポイント ◆評価規準 *留意点 吹き出し:生徒に期待する姿</p>
<p>○常時活動を行う。 ○「きみとともに」の部分練習をした後、通して歌う。（全体）</p>	<p>*ソプラノ、アルト、男声のそれぞれのパートの旋律をピアノで弾き、歌うようにする。</p> <p>・ペアの生徒の声を聴き、良いところや改善点を見つけ、伝えようとする姿。</p> <p>・前向きに声を出す雰囲気を作ろうとする姿。</p>
<p>○本時のめあてを知る。（全体）</p>	<p>歌詞と曲の特徴との関わりをもとに、歌い方を考えて表現しよう。</p>
<p>○曲の山の部分をどのように歌いたいかを考える。 ・ワークシートに記入する。（個人）</p> <p>・個人で考えた意見をグループで共有し、共有した歌い方で歌ってみる。（グループ）</p> <p>・グループの意見をロイロノートに入力する。（グループ）</p>	<p>*分りにくい生徒には、大切だと思う言葉に着目し、その部分の音楽を形づくっている要素と繋げて考えるように促す。</p> <p>*グループは同じパート同士で構成する。</p> <p>*共有ノートに拡大した楽譜のカードを作成しておき、その上にカードをのせる。</p> <p>・自分が着目しなかった音楽を形づくっている要素と歌詞の関わりについて考えを広げている姿。</p> <p>・表現の工夫が適切であるか歌いながら検討している姿。</p>
<p>○クラスで意見を交流する。 ・グループごとに自分たちの考えた工夫を伝える。（全体）</p>	<p>◇【思・判・表 ワークシート・発言・観察】 ◆歌詞と音楽を形づくっている要素（音色、速度、旋律、テクスチュア、強弱など）との関わりを手掛かりに音楽表現の工夫について思いや意図をもっているか。</p>
<p>○合唱する。（全体） ・共有した歌い方で合唱する。</p>	<p>・自分たちの音にしっかりと耳を傾けながら歌う姿。</p> <p>・考えた工夫を音として表すにはどのように歌えば良いかを考える姿。</p>
<p>○振り返りを行う。（個人）</p>	<p>（◇【主 ワークシート・観察】）</p>

5. 授業実践後のカンファレンスの成果と課題

研究授業終了後にカンファレンスならびに意見交換を行った。




それらを踏まえてソフトスキルの育ちやその力の発揮の仕方等について次のように考察した。

ICT 端末を活用した意見の共有で、確実に時間を短縮することができるとともに、本来であれば取り上げられにくかった意見にも目を向けられるようになった。すなわち、50分という一授業内においても全員発表に近い形が多く発問で可能になった。その結果として、生徒が他者の目をつけたところに思考を広げることができるようになった。

なかなか自分の意見に自信が持ちにくかった生徒も、他の意見を見て示唆を得たり、自分と同様の意見の生徒がいることから安心して発言したりする姿も見られた。加えて毎回の常時活動の継続により、声を出すことへの躊躇や不安が払拭されてきており、ハンドサインを頼りに音程感を確認しながら歌い方を試行錯誤する生徒たちの姿を目にするようになった。

また、教師側としては、どのような力をつけたいのかが明確になったために、グループ活動の際に適切で明確なアドバイスを送ることができるようになった。例えば、上記実践授業においては、「歌って試行錯誤する姿」を身につけてほしいソフトスキルとして考えていたが、最初から生徒が自発的にこのような姿に到達するのは当然難しいと考えられた。そこで、教師がグループ活動の際に「歌って試行錯誤する姿」を目指して意識して声かけすることで、だんだんと全体に広がっていった。

<授業で見られたソフトスキル発揮の場面>

	「粘り強く取り組む」 曲の山をどのように歌いたいかについて、個人で黙々と考えている様子が見られた。
	「異なる意見に耳を傾ける」 共有ノートに書かれたお互いの意見を見ながら、歌い方について考えることができた。全員の意見が共有されることで、他のグループの意見を参考にして、さらに考えを深める姿も見られた。自分の意見に自信が持ちにくい生徒の中には、他の生徒が自分と似たような意見を持っていることから、安心して発言しやすくなったと感じている者もいた。
	「表現の工夫が適切か歌って試行錯誤する」 最初はどのグループも意見交流にとどまっていた。教師の声掛けで歌い出すグループが出てくると、少しずつ他のグループも歌いながら試行錯誤しようとするようになった。



「相手に上手に意見を伝える」

クラス全体で、グループで共有した歌い方の工夫を発表した際に、ただの意見の発表では終わらず、どのように歌って欲しいかを動作化して伝えようとした。また、実際に全員で歌って、それに対して自分たちの思いが伝わっていたかをさらに伝えた。

一方で ICT のツールを使用することで一度に多数の意見を共有できるが、生徒が主体的にそれら全てを読み理解することができているのかは、未確定であった。また、自分の意見を入力するのに必死になってグループ活動の際にも皆が画面を向いてしまう場面も見られた。「粘り強く取り組む」姿の側面としては良いが、協働的な学習に関わるようなソフトスキルを育てる側面では、注意が必要である。協働的な学習を支えるツールとしての ICT の活用方法を別に考えていくことが重要課題となった。

また、さらなる発問・課題のブラッシュアップも必要である。上記実践授業においては、生徒のさまざまな意見を出させるために、着目させる「音楽を形づくっている要素」は複数設定してあったが、主となる要素を設定することで学びがよりクリアになったのではないかと考えられる。

今後も引き続き授業実践と研究会を通して、生徒たちのソフトスキルの育成の具体について検討していきたい。